文化資料館調査研究報告(28)：103-110, 2019

聞き書き結果報告

～女性たちに聞く、茅ヶ崎での日常と余暇活動について～

久保有生(*1)・松本美虹(*2)

1　はじめに

平成29(2017)年6月から平成30(2018)年3月まで、茅ヶ崎市文化資料館（以下、文化資料館）のボランティアグループである「文化資料館と活動する会（民俗行事部会)」(以下、民俗行事部会）の一部の会員および元会員の方々6名に8回の聞き書きを行った（表－1)。一人一人への聞き書きではなく、6名共に聞き書きを行った。回によっては参加困難な方がいらしたので、人数が 6 名より少ない回もあった。年齢層は昭和5(1930)年生まれから昭和 15(1940)年生まれまでであり、それぞれ生まれ育った場所は異なるが、茅ヶ崎市内で子育てをした点は共通している。文化資料館にて長年の間、資料整理などにご協力いただいた市民の方々である。

聞き書きの内容としては、実に様々なテーマが浮上したが、今回は「買い物」、「昭和20～40年代のまちとくらし」、「余暇活動」という分類を設け、聞き書き結果の整理を行った。複数の話し手の方にご協力いただいたため、以下本稿では、聞き書き結果を記載する際には、発言者ごとに段落を分け、箇条書き形式とし、段落の最後に表－1内に示した話し手名を【カッコ書き】で記載した。また、本稿中に記した商店などの固有名詞の中には、正式名称でなく、聞き書きで出てきた表現をそのまま使用しているものもある。

表－1　聞き書きの概要

日程および参加者数	第1回　平成29年 6月 8日(木)　6名 第2回　平成29年 7月27日(木)　5名 第3回　平成29年 9月14日(木)　5名 第4回　平成29年10月12日(木)　6名 第5回　平成29年11月 9日(木)　6名 第6回　平成29年12月14日(木)　3名 第7回　平成30年 2月22日(木)　3名 第8回　平成30年 3月22日(木)　4名
聞き手	松本美虹、久保有生
話し手	A氏：昭和5(1930)年生まれ 昭和41(1966)年より東海岸在住 B氏：昭和7(1932)年生まれ 昭和29(1954)年より中海岸在住 C氏：昭和11(1936)年生まれ 昭和54(1979)年より本村在住 D氏：昭和12(1937)年生まれ 昭和16(1941)年より中海岸在住であったが、昭和32(1957)年より他地域へ転居し、昭和44(1969)年より中海岸に戻る E氏：昭和12(1937)年生まれ 昭和22(1947)年から中海岸在住 F氏：昭和15(1940)年生まれ 昭和39(1964)年から浜見平在住
場所	茅ヶ崎市文化資料館

2　買い物

話し手の方々が茅ヶ崎市(以下、茅ヶ崎)に越してこられた時期は昭和 10 年代から昭和 50 年代と様々である。そこで、各年代にどのような場所で買い物をされていたかについて伺い、以下に整理した。

（1）御用聞き

昭和30～40年代頃、A氏、B氏、D氏、E氏は各家の必要な物を御用聞きに注文していた。店は複数あり、各自住まいの近くの店をよく利用した。

毎日午前中に、魚屋、肉屋、八百屋などが家に来て、品物を注文すると昼や夕方に届けてくれた。必要がない日は断わっていた。支払いはその場で払うのではなく、月末払いで、月末に自宅まで店

の方が大福帳を持って来た。また、御用聞きをしてくれる店に行って、買い物をすることもあった。【B氏・D氏】

昭和 29(1954)年に茅ヶ崎へ越してきたが、越してきた当時から御用聞きを利用していた。【B氏】

平成 20(2008)年頃より通常の御用聞きを断り、用事がある時のみ電話で注文するという方法に切り替えた。【D氏】

1）魚屋

魚屋が品書きを持って各家をまわった。品書きは、1 枚の「経木」[1)]のようなものにその日に捕れた魚の名前を書いたものだった。魚の種類は毎日異なり、その都度、品書きを見て、欲しい魚を注文した。そして魚屋が注文された魚を経木などに包んで、夕方に家まで届けてくれた。【B氏・D氏・E氏】

氷式冷蔵庫を使用していた頃は、魚屋が氷を届けてくれた。その氷は一貫目(3.75kg)で、大きさは食パン 2 斤分程度だった。氷は、「カッチン」という氷を左右から挟む道具や荒縄を使って持ち上げて、自転車の荷台に載せて家まで運んでいた。氷式冷蔵庫内で溶けた氷の水は、冷蔵庫の一番下の部分に設けられていたバットのような受け皿に溜まるようになっていた。受け皿はすぐに溶けた水でいっぱいになってしまうので頻繁にその水を捨てる必要があった。昭和 30(1955)年頃に電気式冷蔵庫に買い替えた。【B氏・D氏】

共恵の現在の海岸通り沿いにあった「魚佐商店」を利用した。【E氏】

中海岸の現在のサザン通りから西へ 1 本入ったところにあった「魚民」を利用した。【D氏】

東海岸南の現在の雄三通り沿いにあった「魚紋」を利用した。【A氏】

2）八百屋

平成 26(2014)年頃まで共恵の海岸通り沿いで営業していた「八百浜商店」が閉店するまで御用聞きを利用していた。御用聞きの良いところは、店の人が季節の食材を教えてくれ、「あなたのお母さんはこの時期にこのようなものを作っていたよ」と話してくれるところにあり、そういった会話から店との繋がりを持てた。【D氏】

東海岸南の現在の雄三通り沿いにある「大阪屋」を利用していた。【A氏】

3）肉屋

共恵の現在の海岸通り沿いにあった「小島肉店」を利用した。【B氏・E氏】

中海岸の現在のサザン通り沿いにあった「稲国屋商店」の中にあった肉屋を利用した。【D氏】

現在の茅ヶ崎駅(以下、駅)南口ロータリー付近にあったスーパーマーケット(以下、スーパー)「ユニオン」の中に入っていた「北村肉店」を利用していた。【A氏】

4）その他

「一軒屋」という酒屋が中海岸の高砂通りと鉄砲道の交差点近くにあった。砂糖、塩、醤油、味噌、酒、石炭、薪、練炭、炭、竹箒など様々な商品の取り扱いがあり、利用した。【B氏、D氏】

現在の雄三通りと鉄砲道の交差点にあった「金森酒店」では、味噌や醤油などの取り扱いがあり、利用した。【E氏】

クリーニング店も家まで来てくれ、週に 2 度ほどYシャツなどのクリーニングをお願いしていた。【A氏・B氏・D氏】

東海岸南の現在の雄三通り沿いにある「三洋クリーニング」を利用していた。【A氏・B氏】

中海岸の現在のサザン通りと鉄砲道の交差点の近くにあった「旭クリーニング」を利用していた。【D氏・E氏】

（2）スーパーマーケットなど

中海岸の現在のサザン通り沿いにあった「クラウン」は市内でも早い時期にできたスーパーだった。【E氏】

クラウンは昭和 40(1965)年頃にはすでにあったと思う。【D氏】

現在の駅南口ロータリー付近にあった「ユニオン」に入っていた糸屋や肉屋を利用した。【A氏、B氏】

昭和 30(1955)年頃、姑に頼まれ、茅ヶ崎に売っていないものを買いに週に 1 回ぐらい平塚や大磯などにおつかいに行っていた。その際は、海岸沿いを鎌倉から大磯まで走っていたバスを利用した。【E氏】

昭和 39(1964)年に越してきてから、団地の近くのスーパーを利用した。また共恵の駅南口近くにあったみなみマートへ買い物に行くこともあった。中に入っていた食品店や手芸店を利用した。新栄町の現在のエメロード（当時は銀座通り）沿いにあるショッピングセンターも利用した。【F氏】

昭和 54(1979)年に茅ヶ崎へ越してきてしばらくして仕事を始めたので、配達を頼むことが多かった。高田の県道沿いにある生活クラブをよく利用した。また以前は本村の現在の室田通りの近くにスーパーがあり、便利でよく使っていた。国道１号線に近い室田通り沿いには肉屋や八百屋、竹籠屋などがあったが現在は住宅となっている。【C氏】

３　昭和 20～40 年代のまちとくらし

A氏、B氏、D氏、E氏はそれぞれ昭和 10～40 年代に茅ヶ崎に越して来られ、中海岸や東海岸で過ごされた。主に印象に残っている昭和 20～40 年代の中海岸や東海岸周辺のまちの様子や当時のくらしぶりについて話を伺い、以下に整理した。

（１）まちの様子

１）畑・養鶏所

戦時中、中海岸にあった家の庭は麦畑として利用した。【D氏】

昭和 25(1950)年から昭和 30 年代頃にかけて、中海岸では麦畑や芋畑が多く見られ、その中に住宅が点在していた。【B氏・D氏】

小学校高学年だった昭和 25(1950)年頃、中海岸一丁目の鉄砲道沿いには 200 坪ほどの桑畑があったが、昭和 32（1957）年頃にはもうなくなっていた。【D氏】

昭和 30(1955)年頃は自宅近くに南湖の方が耕作されていた麦畑があった。畑にまくための水を運ぶために大八車やリヤカーが使用されていた。【B氏】

昭和 30(1955)年頃、中海岸二丁目の現在の鉄砲道沿いに養鶏所があった。近所を通ると鶏の鳴き声が聞こえた。【B氏】

前述の養鶏所は昭和 44(1969)年にもまだあった。【D氏】

２）松林（マツバヤシ）など

昭和 30(1955)年頃の中海岸三丁目の海沿いには松林が広がっていた。松はまださほど背が高くなかったように思う。現在の国道 134 号線にあたる海岸沿いの道路の北側には、その松林の中にドイツ人の方が暮らす洋館が 2 軒あった。洋館の向かい側には厩(ウマヤ)があった。昭和 30 年代頃、義母がそのうち 1 軒の方にアップルパイなどのお菓子の作り方を習っていた。当時、松林はあったものの、海岸近くの家では風が吹くと家の中が砂だらけになった。昔の家のガラス戸はすき間があり、ガタガタしていたので、風のひどい時は足跡が付くくらい屋内に砂が入って雑巾がけが大変だった。昭和 35(1960)年を過ぎたあたりから松林の中にあっという間に次々と家が建った。また、以前は現在の国道 134 号線から波打ち際までが広かった。現在はずいぶん砂浜が狭くなったように感じる。【E氏】

中海岸三丁目の茅ヶ崎館の近くにもドイツ人の方の屋敷が 1 軒あり、その中にお菓子などが食べられる店があった。そこでバームクーヘンを食べた。店は昭和 40(1965)年頃まであったのではないか。【D氏】

３）鉄砲道

昭和 16(1941)年に茅ヶ崎に越してきた頃、東海岸北二丁目と東海岸南二丁目あたりの鉄砲道沿い

にはほとんど家はなく、路面は砂利敷きで、大八車がやっと通れる程度の幅であった。その後、二車線になり、バスが通れる幅になった。鉄砲道を広げる際、鉄砲道沿いに家があった方は敷地の一部をセットバックした。【D氏】

４）高砂通り

以前は舗装されておらず、デコボコで雨が降ると水が溜まった。また、雨が降っていなくても駅に行く途中、砂利で革靴が汚れてしまった。昭和30 年代頃は、革靴が貴重品だったこともあり、東京などに出かける時には、駅までは別の靴を履いて行き、その靴を駅前で預け、革靴に履き替えるようにしていた。駅南口前にあった自転車預り所では、自転車と一緒に靴を預けることができた。【D氏】

路面が舗装されたのは、平成 10(1998)年に開催された国体に合わせて茅ヶ崎公園野球場が改修された時だった[2)]。【B氏】

高砂通り沿いの松籟荘の池にはカエルがたくさんいた。高砂通りに車が頻繁に通るようになると、春先にカエルが道路で車にひかれているのをよく見かけた。【A氏・B氏】

５）茅ヶ崎駅南口

昭和 29(1954)年に茅ヶ崎に越してきた頃、駅南口には人力車があった。また、輪タクの乗り場があった。昭和30年代頃か、実家の母親が茅ヶ崎の家を訪ねる時に、駅から輪タクを利用していた。【B氏】

（２）くらしの様子

１）炊事

小学生だった昭和20年代前半は、朝起きると母親が枯れ木などを入れて七輪で火をおこしていた。ガスが通ったのは昭和 30(1955)年頃だったが、それ以前にニクロム線の電気コンロはあった。また、家では鶏を飼っており、お客様が見えた時に、父親が鶏をしめて鍋として振る舞った。【D氏】

ガスが通るまでは練炭を使って炊事をした。家の外で練炭に火を付け、パチパチと音がするようになったら練炭コンロへ移した。火力が強い時に夕飯の準備ができるように夕飯前に練炭をおこし、お米を炊いた。使用後は練炭を翌朝も使うために練炭コンロの小窓を閉め、覆いを被せるなどした。翌朝に覆いを外し、一生懸命うちわであおぎ再び火をおこして大切に使った。しかし、昼過ぎには灰になった。庭に灰を捨てる場所があった。【B氏】

練炭は「一軒屋」が御用聞きで届けてくれた。縁の下や物置などに常備していた。【B氏・D氏】

ご飯はかまどと練炭両方を使って炊いた。練炭の場合は、練炭コンロの上で羽釜でなく文化鍋を使った。【D氏】

昭和20年代後半までは、薪を使ってかまどでご飯を炊いていた。土間にかまどと井戸があった。【E氏】

昭和 25(1950)年頃に近隣宅がプロパンガスを初めて引いた。ガスが通ったのは昭和 30(1955)年頃だった。【B氏】

茅ヶ崎に越してきた昭和 29(1954)年頃は既に家に水道が引かれ、炊事は家のお勝手で行った。当時はまだ下水道が整備されていなかったので、炊事や洗濯、風呂などで使った水は裏庭に掘った 1ｍ四方の穴へ流して、砂に吸い込ませた。【B氏】

昭和30年代頃までは下水道は整備されていなかったので、家で使用した水は庭に穴を掘って砂に吸い込ませていた。【E氏】

昭和 41(1966)年に越してきたが、まだ下水道がなかったので、庭に浄化槽を設置した。【A氏】

２）風呂

ガスが通る以前、家の風呂は五右衛門風呂だった。風呂釜は鉄製だったが、風呂釜内に入る時に鉄に触れても火傷するほどの熱さではなかった。しかし風呂釜の底の部分は熱かったため、その底に厚い円形の板をはめて使っていた。円形の板には、風呂釜に設けられた突起にはめるための穴が数か所空けられていて、そこが劣化すると板が水

中に浮くようになるので、劣化した時は修理して使っていた。板は何枚かあって交換して使っていた。風呂には煙突がつけられ、定期的に煙突屋が掃除に来ていた。火を起こすために「バタ薪」を使った。バタ薪は一尺ほどの皮付きの薄い板で、「一軒屋」が束で届けてくれた。バタ薪は薄いので、早く火がついた。まず、10cm 程の長さの薄い木片の一端に硫黄を塗りつけた「付け木」を敷き、その上にバタ薪を置いてマッチで付け木に火を付けた。バタ薪が燃えたら石炭を入れた。【B氏】

ガスが通る以前は、木製の風呂だった。風呂に水をためる時はトタン製の樋を繋げて、井戸から風呂へ水を入れた。小学校高学年だった昭和25(1950)年頃には、井戸のポンプ押しを 100 回ほど手伝うとお小遣いがもらえた。それからまもなくして水道が引かれたと思う。【D氏】

いつ頃かは覚えていないが、風呂は薪で焚いていた。付け木を使った記憶がある。【E氏】

３）洗濯

茅ヶ崎に越してきた昭和 29(1954)年頃は既に家に水道が引かれていたが、洗濯は井戸の水を使って家の外で行っていた。庭にあった井戸の下にセメント製の「外流し」を設けた。外流しは立って洗濯ができるような位置に作られていた。外流しの隣にはかまどが 2 つほどあり、井戸の水をお釜に入れてそのかまどでお湯を沸かし、洗濯や掃除などに使った。外流しとかまどの上には屋根が設けられていた。【B氏】

井戸を使う時には、はじめに空気を抜くために「呼び水」といってポンプの上から水を入れることがあった。井戸は屋内（台所）と屋外にあった。屋外の井戸にはポンプはなかった【D氏】

寒くて井戸のポンプの中の水が凍ると、やかんでお湯をかけてポンプの上の方の氷を溶かして使った。【B氏】

４）庭

以前は 4 月頃になると、庭でアオダイショウをよく見かけた。庭木の枝などに抜け殻が引っかかっていたこともあり、息子がその抜け殻をおもちゃにして遊んでいた。ネズミもよく見かけた。【E氏】

春になるとカエルがよく庭に出た。庭に水場があると、カエルが卵を産んだ。【B氏・E氏】

庭は砂地だったため、義母が庭木を植える際には、黒土を入れてもらっていた。また、義母と義父がトイレから汲み取ったものを肥料として庭木のところに撒いていた。【E氏】

５）給食

終戦後、学校で給食が始まったばかりの頃は、干しブドウのみやジャムのみという時があった。ジャムのみの場合はパンを持参した。パンは母が家のコンロで焼いてくれた時もあった。牛乳はなく、脱脂粉乳だった。脱脂粉乳はバケツに入れてあり、当番が柄杓ですくって配膳していた。味はよくなかった。【E氏】

給食にはアルミニウムの食器が使われていた。また共恵の現在の海岸通り沿いにあった「ベーカリー冨貴堂」が給食にパンを卸していたと思う。【D氏】

４　余暇活動

話し手の方々は民俗行事部会の他にも余暇活動としてそれぞれ生涯学習活動や地域の活動を行われていた。以下、話し手毎にどのような活動をされていたかについてお話を伺い、整理した。

（１）Ａ氏、Ｂ氏、Ｄ氏、Ｅ氏の活動

Ａ氏、Ｂ氏、Ｄ氏、Ｅ氏は「あしかび郷土史研究グループ」（以下、あしかび）という茅ヶ崎市内の昔の暮らしなどを調べていた研究グループに所属し、活動されていた。今回この 4 名の方にはあしかびの活動について伺った。

グループ結成のきっかけは、昭和 46(1971)年に社会教育課の委託学級として行われた「あしかび学級」だった[3)]。講座終了後、これで終わるのは残

念であり、もう少し深く勉強したいという気持ちがあったため、受講生でグループを結成した。講座で講師をされていた丸山久子先生に指導をお願いした。また、社会教育課や文化資料館の職員などの指導もあり、民俗学の聞き書きの方法などを学んだ。【A氏、B氏、D氏、E氏】

参加者は茅ヶ崎市外から移り住んだ主婦が多く、子どもの年齢が近かった。自分達の子ども達にとっては茅ヶ崎が故郷となるので、親である自分達も茅ヶ崎の歴史を学び、子どもたちに伝えたいと思い、活動が始まった。【A氏、B氏、D氏、E氏】

まずは、茅ヶ崎市内のお年寄りに昔の生活について話を伺う聞き書きの活動を始めた。二人一組となって、話し手のもとへ自転車や車で何度も訪ね、話を伺い、カセットテープに録音した。そしてテープおこしを行い、その結果をまとめた。テープおこしの作業はとても大変だった。突然、話を聞きに行くと保険の勧誘などと勘違いされてしまうこともあったため、教育委員会の紹介状を持参したこともあった。そしてその聞き書きした結果を『としよりの話』[4),5),6)]と題して、担当者がそれぞれ手書きで全 3 巻の刊行物にまとめた。聞き書きは初めての作業で、話し手から話を聞き出すことに苦労した。今振り返ると、話し手の方々がよく協力してくださったと思い、感謝している。貴重な経験で自分たちの財産となっている。【A氏、B氏、D氏、E氏】

その後、聞き書き結果の中で女性に関係する話に着目し、それらを百年前の一人の女性の一生としてまとめ、『田の字の家』[7)]を刊行した。『としよりの話』が小学校の副読本になったこともあり、『田の字の家』を作成する際は、子どもでも読めるようにやさしい文章にすることを心がけ、挿絵を入れて読みやすくまとめるように工夫した。【A氏、B氏、D氏、E氏】

その後、文化資料館より端切れなどの衣類資料の整理を手伝って欲しいと依頼され、文化資料館の資料整理グループとして整理作業に協力した。メンバーの中には以前より繊維、着物などに興味を持っている方がいた。そして平成 9(1997)年には「着物で暮らした　あの日あの頃」という文化資料館の展示の制作にも携わった。【A氏、B氏、D氏、E氏】

（２）Ｃ氏の活動

昭和 54(1979)年に茅ヶ崎に越してきてからまもなくして、図書館で製本作業を習う教室があり、参加した。その後、貸し出し本の落書きや破損などを修理するボランティア活動に携わった。それから文化資料館の職員と知り合い、声をかけてもらうなどして、様々なグループや活動に参加した。元々好奇心が強く、学ぶことが好きで、茅ヶ崎について何でも知りたい気持ちを持っていた。参加した主な活動としては、地名の調査や『吾妻鏡』の読書会、陶磁器の調査や勉強会、石仏や五輪塔の調査などであった。そうした活動を通じて様々な方とつながりを持つことができた。石仏や五輪塔などの調査では、市内を自転車でまわり、時には畑の周辺まで足を伸ばし、写真などの記録をとった。調査にはちりとりと箒を持っていくことがあり、調査でその場を汚すことがないように気を付けていた。文化資料館の職員のサポートのもと、それぞれのグループのメンバーと現地を歩いたり、本を読んだりすることが楽しかった。また、故郷と茅ヶ崎とでは文化に違いがあり、そういったことを感じるのも興味深かった。【C氏】

「一樹会」という郷土史や日本の歴史を学習するグループにも所属した。メンバーは同年代の女性たちだった。一樹会の活動のきっかけは、自分たちの子どもの故郷となる茅ヶ崎について、茅ヶ崎のことをよく知らない自分たちがまずは知っておきたいと思ったことだった。一樹会では、茅ヶ崎にゆかりのある人々について、現地調査、関係者やお年寄りへの取材、参考文献調査などを行い、その結果を人物誌としてまとめ、茅ヶ崎市の広報

誌である「広報ちがさき」に連載した。さらにそれらをまとめて、『茅ヶ崎ゆかりの人物誌』[8]を刊行した。【C氏】

また、子どもが好きだったので、毎週土曜に神社の境内にある自治会館にて、子ども達に本を貸出する「菱沼文庫」という活動にも参加した。貸出す本は、図書館から車で運搬されてきた。図書館が運営を行い、本を選定し、配達する場合もあった。10 年程度活動していたが、次第に子ども達が借りに来る頻度が減ったため、活動頻度も減っていった。【C氏】

（３）Ｆ氏の活動

昭和 39(1964)年に浜見平団地に越してきて、子育ても落ち着いてきた昭和 56(1981)年から、団地内の「浜見平文庫」という活動に参加した。浜見平文庫とは、毎週土曜日の午後に、団地の集会所にて子ども達に本を貸し出す活動のことで、団地は図書館が遠かったため、自治会の予算で毎年本を購入して、子どもたちにそれらの本を貸出ししていた。浜見平文庫は昭和 45(1970)年頃から平成 30(2018)年まで続けられ、最終的な蔵書数は約 6000 冊であった。利用対象は、開始当初は子どものみであったが、次第に大人までに広げられた。話し手の方は、活動の最後まで本の貸し出しや管理作業に携わられた。1 年に 1 回「文庫まつり」を開き、人形劇を行った。その他、絵本の読み聞かせも行われていた。【F氏】

平成 5(1993)年頃から数年間、各地区から集まった編集委員が広報活動を行う「地域づくり」という市の事業に参加し、新聞を作って全戸配布する活動を行っていた。その活動が終わってから、文化資料館の行事に参加するようになり、平成 9(1997)年の市外文化財巡りに参加した際に、文化資料館職員から誘いを受け、民俗行事部会に参加するようになった。【F氏】

５　おわりに

今回の調査では、昭和前期から現代までの幅広い年代における様々なテーマの話を聞き書きさせていただくことができた。

「買い物」では、時代やくらしの変化とともに変わりゆく買い物の様子を伺うことができた。特に、現代ではあまり見られなくなってきている御用聞きの詳細について整理することができた。

「昭和 20～40 年代のまちとくらし」では、ガスや水道設備などが整えられる以前のまちとくらしの様子を伺うことができた。現代とは大きく異なる 50～70 年ほど前の茅ヶ崎での日常を、女性ならではの目線で細やかに垣間見ることができた。

「余暇活動」では、それぞれの方が民俗行事部会以外に地域貢献につながる様々な活動をされていることが分かり、その話を伺うことができた。話し手の方からは、自分たちが活動を行った昭和 40 年代以降は生活様式などが変化し、女性が家事と両立して家の外へ出て行きやすくなった頃だったとのお話があったが、主婦の仕事と家の外で参加された活動の両立にはご苦労があったことと思われる。

今回の聞き書きでは多くの話を伺うことができたが、その全てを本稿中にまとめることはできなかった。それらの整理については今後の課題としたい。

謝辞

この度、聞き書きをさせていただいた６名の方々には、調査に多大なるご協力をいただき、大変お世話になり、多くのことを学ばせていただいた。改めて感謝申し上げる。また調査結果の整理作業でご協力をいただいた岩城奈都子氏、佐藤純子氏にも感謝申し上げる。

注釈・参考文献

1）スギやヒノキなどでつくられた薄い木の板で、肉や魚を包むために使われるもの。

2） 国体が開催された年は、神奈川2020事前キャンプ誘致等委員会：茅ヶ崎公園野球場〈 www.kanagawa2020.jp/ja/athletic/facility-6514/〉を参照した(2019年3月9日閲覧)。
3） あしかびの活動については、茅ヶ崎市文化資料館(1992)『資料館だより No.80』に詳しくまとめられている。
4） あしかび郷土研究グループ(1975)『としよりの話』
5） あしかび郷土研究グループ(1978) 『としよりの話２号』
6） あしかび郷土研究グループ(1979) 『としよりの話３号』
7） あしかび郷土研究グループ(1994) 『田の字の家　100年前に生まれたおばあさんの話』
8） 郷土史学習グループ　一樹会(1997)『茅ヶ崎ゆかりの人物誌』

*1　茅ヶ崎市教育委員会社会教育課
茅ヶ崎市文化資料館
*2　茅ヶ崎市教育委員会社会教育課
茅ヶ崎市文化資料館　元学芸員